

知床の森から



エゾアオイトトンボ
(アオイトトンボ科)
北海道の北部～東部で局地的に見られる。湿原の中の池や沼で発生。体長4cm強で脚部が長い。産卵ではつとずるほど美しいトンボである。

北見支店 ☎ 099-41 北見市東区豊原町11番地
知床森林センター ☎ 01522-3-3009 FAX 01522-3-3160

今なお、噴気活動が続く 知床硫黄山の新噴火口登山

第38回「森林レクリエーション・In知床」『知床硫黄山新噴火口登山と植物観察』を、8月20日(水)に実施しました。

コースは、硫黄山登山全行程の3分の1程度。現在も激しい噴気・熱水活動が続いている新噴火口第1号火口までの登山です。

参加者は総数45名で、年齢23才から83才まで、応募人員100名を超える中から抽選で選ばれた幸運なみなさんです。

午前11時ごろ、観光で有名なカムイワッカの滝近くにある登山口から登山を開始しました。総勢53名の長い隊列がスロープに

線を描きます。スタートから急な登りとなりますが、少し登ると傾斜は緩くなりミズナラ、ミヤマハンノキ、ダケカンバなど矮小した木で覆われた樹木のトンネルが続きます。木々にはコエゾゼミが残翳を惜しむかのように鳴き止まぬ喧騒の中、心地好い汗を流しながら少しづつ登って行きます。

稜線に出ると視界は開け、右手眼下にはカムイワッカの滝、振り返れば真つ母なオホーツク海など自然の雄大さに、登りの辛さも感されていました。さらに進むと登山道の崩壊した場所や堆積する岩の塊を四肢を使って進み、最後の火山礫を登り12時30分ごろ新噴火口に到着しました。

朝早く出発してきた参加者たちは少々遅い昼食を待ち望んでいたように、思い思いの場所で和気あいあいと食事をした後、周囲を散策したりなどして一時の休憩を楽しんでいました。

新噴火口をバックに全員で記念撮影をし13時ごろ下山をしました。1日中、晴天に恵まれみなさんとても満足そうでした。



◆タン・タン・タン・タン…なぶたの暖き太鼓を練習する音が街中に鳴響くと、しれとこの夏は始まる。◆しれとこなぶたは、文化四年(1807年)斜里で北方警備に当たった津軽藩士殉難慰霊の縁により、友好都市弘前市との交流で昭和58年から始められたという。◆役場庁舎の裏手、紺碧のオホーツク海が望まれる砂丘の上に、津軽藩士殉難慰霊の碑は、セミの鳴声があふみ渡る深い夏木立の中にある。◆碑文に「北方の風雲急を告げる文化四年……津軽藩士百

名が静遊のこの地に……朔北辺境の気候風土は耐え難く……衣服食糧共に乏しく水腫病の蔓延するところとなり……国許津軽へ帰還した者わずか十七名にすぎず、その多くは斜里場所創成期の礎石と化した……」とある。◆傍らに文化九年、ゆかりの者たちが建立した津軽藩士死没者の供養碑(斜里町指定有形文化財)が、寄添うように行む。◆今年のしれとこなぶた祭りは、7月26～27日に真夏の熱気にあふれて繰り広げられた。なぶたが終わると知床の空は秋の風が烈い始める。

知床・新たなる魅力 羅臼湖で初のイベント

第37回「森林レクリエーション・In知床」『植物観察・羅臼湖湖沼巡り』を、8月2日(土)実施しました。

今回は初めてのコースで、帯広営林支局標津営林署が管理する国有林で、登山コース沿いに点在する湖沼群と最終目的地の羅臼湖です。参加者は男性10名を交えた総数48名で、午前10時30分ごろ羅臼湖登山口から登山を開始しました。

標高700m級のこの一帯は吹き下ろす風で樹木は変形し、ハイマツが見られる亜高山帯ですが、湿原や小沼が点在する高層湿原でもあります。周囲は一方にラウス岳を始めとする高山を形成するなど、造形と配置の妙で人々を魅了しているところです。

「一の沼」は小さく、ハイマツや低い樹群に包まれて静寂なところ。「二の沼」はラウス岳とセットで一段と映えるところ。「三の沼」は水を湛えて光り、ここからは低湿地帯がコースとなるところ。



「四の沼」はヒオウギアヤメの群落がよく、「五の沼」はヨシなどで地味な装いとなっています。

「羅臼湖」は水深1.5m、周囲6kmで、標高720mのところにあります。木道沿いの湿原にはトウゲブキの黄花や、アオチドリの薄緑色の群落が見事でした。当日は往復5km余りを約3時間かけ、山、森、湿原、花々、野鳥の声など自然があふれている中を歩きました。

ここは簡単には行けない秘境という思いが先行しがちなところで、そのせいか参加したみなさんは今日の一日を喜んでいました。

除伐作業を体験しました

午後から知床五湖で自然観察

第15回「森とのふれあい」『森の手助け・除伐作業と自然観察』を、7月4日（金）実施しました。

今回は森をつくる過程での、除伐作業（育てる樹木の生育を妨げる他の樹木やつる類を取り除く作業）を体験して、あわせて森の働きを理解していただく「自然観察」です。

近隣市町からの18名の参加者（男性7名女性11名）は、午前9時頃センターを出発し、一路除伐作業地に向かいました。

作業地は知床半島の付け根で、オホーツク海岸線から林道を内陸部に約4km入った地点で、林道沿いにある植栽後15年経ったアカエゾマツの人工林です。

作業開始前に、怪我やハチの飛来に備え、ヘルメットや防蜂網・防蜂手袋をつけ、また作業用履鞋をつけて装備完了です。

作業の説明、注意事項、職員による実演を行い、その後三班にわかれそれぞれの作業地に向いました。



除伐する木は手鋸で切ります。はじめのうちは、ぎこちなかった鋸もすく馴れて、スムーズに切ることができました。

中には切った木が倒れず苦労しましたが、みんなで力を合わせて倒していました。

作業時間は一時間ほどの短い時間でしたが、作業のあとみなさんはそれぞれの感懐を述べ、この除伐体験から何かを感じ取ったようです。

午後からは場所を「知床五湖」に移し、自然観察を行いました。

長い年月を経たミスナラやイタヤカエデなどの大木や、湖面に咲くエゾヒツジグサやネムロコウホネなどの水蓮を観察しました。森では小鳥がさえずっていました。

コースを巡りながら、過酷な知床の自然環境が造りあげた多くの現象を観察しました。

中でもトドマツの幹に歴然と刻まれたエゾヒグマの愛ましい爪痕には歓声が上がリ、身近にのぞき込んだり記念写真を撮っていました。

当日は一日中蒸し暑い天気でしたが、午前中は除伐作業の体験、午後からは場所を変えての自然観察と、変化のある一日をつつがなく終えることができました。



体験をとおして

森林の理解を

知床森林センター

知床森林センターでは、平成9年度から国民参加の森づくりの一環として、新たに体験林業を実施しました。

これは、日頃森林への興味はありつつも、森林に接する機会のない方または少ない方々に対し、じかに森づくりを体験することで森林のはたす役割などを理解していただくことを目的としています。

本年度は春は植樹、夏は除伐の体験林業を実施しましたが、参加者からは、「貴重な体験ができた」「一人でも多くの国民が、このような体験をして森林を大切にしてほしい」、「山づくりのための目に見えない苦労が分った」、「体験林業に参加したことで、新聞やテレビのニュースを見る目が変わった」などの感想が寄せられています。

当センターとしても、本年度の実施状況などを踏まえ、来年度もこの体験林業を引続き行っていきます。



みなさん

参加者の声

- ◆山奥に入って、植樹した後の除伐作業の一部を体験できたことは今後なにかと参考になると思っています。林業関係者の目に見えない苦労が身にしみてわかりました。
- ◆植樹・除伐・間伐・下刈などは、わたしもカラマツの山林所有者ですので特別の関心事です。
- ◆夏休み東京から来る孫たちに説明できる沢山の資料ができ、「森とのふれあい」を教えたいと思っています。
- ◆火害（蜂刺されも含み）から身を守るとはいえ、ヘルメットは重いし、ネットを付けるとむし暑く、現場で働く人たちの苦労を、

今回短い時間でしたが体験することができました。

- ◆除伐作業の手順などはわかりました。実際に作業に携わっている人たちの苦労を知ることができて良かったと思っています。

- ◆知床五湖にはよく行きますが、今回の自然観察会は、わかりやすい説明で、五湖の良さを再発見しました。

